

物理学者になりそこなうの記

関 寛 治

伏見先生のお名前は、私にとっては子供のときに知った偉大な日本の科学者の名前であった。亡くなられた湯川先生や朝永先生の名前よりもはるかに早い時期に知っていたという子供の時代の印象が残っている。『科学智識』という雑誌が瀬戸内海の小島、大崎下島にある大長まで毎月郵便で送られて来た。この雑誌をバラバラめくりはじめた時期の記憶は定かでない。農林省の分場の水産試験場長をしていた父は、昭和一ケタの時期から九ミリの撮影機と映写機を持ち、『科学智識』を愛読していた。広島県の大長分場から岡山県の笠岡分場に父が転動したのは一九三七年（昭和十二年）日中戦争が盧溝橋ではじまって約一ヵ月後のことであった。大長でも笠岡でも映画監督になった大島渚さんとは幼なじみであった。その頃小学校の五年生ではあったが平凡社の百科辞典が送られて来るとすぐ物理学に関係するところをわからないながらも興味をもって読みはじめた。『科学智識』の影響だったと思う。量子論やアイ

ュタインの名前を知ったのもこの頃のことである。そして何時の間にか『科学智識』に連載されていた伏見先生の「驢馬電子」に気づくようになり、ついに原田三夫の「原子の話」にまでたどりついた。それは父が広島県の水産試験場長に転勤になって修道中学校にいらしてしばらく後のことであった。広島ではその後爆心地近くになった県立図書館蔵文庫でこの本を見つけて自分でも買った。一九四〇年（昭和十五年）だったという記憶が残っている。私には原田三夫が子供向きに書いてくれたものの方が伏見先生の書いたものよりもはるかに易しかった。それらを通して「E=mc²」の式にふくまれる深遠な意味をよみとろうとした。また原子エネルギーの開発が世界を根柢的に変革するものだという予想を中学二年生なりに持つようになった。配風将校が軍事教練のとき銃剣術で「うちてしやまん」と教え、敵を殺す意志を持てと陸軍式イデオロギーをも注入するような時代であった。こういった教育に体質的嫌悪感をもったのはルネッサンス以来の科学史の知識をわずかながらもちはじめていたせいかも知れない。「科学は国境をこえる」マダム・キュリーの娘の書いた「キュリー夫人伝」からもこのことを学んだ。配風将校の上になつて愚かな陸軍の将官達に対して戦争の無意味さをさとらせるにはどうしたらよいか。物理学者が原子爆弾を作ることがそのための先決だと考えるようになった。

中学三年になった一九四一年（昭和十六年）の夏、広島県から静岡県に移動した。父が静岡県水産試験場に移って魚群探検機をはじめ導入しようとしたからである。富士山の見える静岡中学校まで毎日清水から電車で通うようになったのはその頃である。古典物理学の範囲内ではあったが面白い物理の先生がいて物理学への興味も本格的になって行った。十二月八日に真珠湾攻撃のニュースを聞いたとき、海軍は陸軍より科学的にすすんでいると感心したことを覚えていた。それだけにますます、この戦争の終りは原子爆弾によってもたらされるようになるだろうと考えるようになった。日本が原子爆弾を先に作るかも知れない。しかしアインシュタインの『物理学は如何に創られたか』を読んだからは、アメリカの方が先に原子エネルギーの解放をやりとげるにちがいないと思い直した。そうなれば日本はすぐに降伏せざるをえない。中学の四年の頃からそう考えたため、学校に通うのが当時の軍国主義的教育のもとではやりきれない気持ちになって行った。

量子力学の難かしい本はその頃まだ出ていなかった。昭和十七年静岡の谷島屋書店の書棚に河出書房から出版された伏見康治著『確率論及統計論』を見つけたが、難かしくて手が出なかった。中学四年の中頃のことだったと思う。小倉金之助の『統計』を少し勉強していたので統計に興味をもち本屋でバラバラめくって見た。今でも第八章のエル

ゴード理論という表題を見て中学生ながら深遠な哲学を発見したような気がした。伏見先生は偉い学者だと本当に感嘆した。そして第九章の「量子統計力学」という表題からは、量子力学を勉強するのに統計学もいるのだという中学四年生なりの強い印象をもった記憶がある。

第一高等学校の理科を受験するつもりになったのも、この本がわからないながら強く私の心をうったことと無関係ではなかった。

一九四三年（昭和十八年）の二月、十五歳で一高理科に挑戦したが二次でうまく行かず失敗した。そのとき一高に合格した中川直哉さんは今宇宙化学をやっている。

一九四三年の秋ルイ・ドゥ・ブロイの『新力学における量子化の理論』が堀伸夫訳で出版された。すぐにそれを手にしたが、伏見先生の書物と同じように中学五年の数学では歯がたたなかった。しかし「キュリー夫人伝」の影響もあり量子力学や相対性理論が国境をこえた普遍的な性格をもっていることやそれをおしすすめる国際的ネットワークが成立していることに心を奪われるようになった。ますます軍国主義化を強める中学教育には反撥心を強く感じ作文にロボットを作れば戦争は無意味になると書いて国語の教師から落第点をつけられた。一九四四年戦争のげしくなる中で内申重視のふるいわけがあったので入試の上では最大の痛恨事となった。

とにかく終戦の年に静岡の理科に入学し、伏見先生の難かしい本を読もうと本格的な勉強をはじめたが、飢餓状態の中で結核にかかり、二年以上も休学するという破目におちいった。こういったことからついに旧制高校は文科卒業ということになった。そして五〇年に東大法学部に入學した。物理学者にはなりそこなったわけである。しかし少年の頃伏見先生という忘れがたい物理学者の本を読まれたことは、その後も、物理学が学問の王様だという感じをすてがたくした。大学時代もほとんど自宅療養をして東京に行かなかったので、法律の勉強をするよりはむしろ伏見先生の『量子統計力学』（共立出版）を買って来て読むといったような状態であった。裳華房から出た湯川先生の『量子力学序説』と共に古本屋で別の本を売り払ってその金で購入し、死ぬかも知れない重病の病床で読んで記憶は今も生々しい。難かしいところをわからせる必要上山内恭彦の『一般力学』や高木貞治の『解析概論』などにも順次手を出して法律の勉強は試験の時以外は一切やらなかった。しかし伏見先生や湯川先生の書いたものは、読めば簡単に理解できるような法律学者の書いた教科書にくらべるとはるかに難かしいものと感じられた。お二人は私にとってはごく頭のよい科学者だったわけである。

大学を出ても行くところがなかったので大学院にはいって結局国際政治と平和学の専門家になってしまった。しか

し核兵器の問題は常に私の頭の中からは消え去らなかつた。ヒロシマに原爆が落ちたとき新型爆弾というニュース報道に対して旧制高校の飢餓状態の寮の中で即刻『ヒミコ』ではないかと直観したことは私のその後の国際政治学と平和学の中にも太い軌跡を描いている。

五〇年代頃から米国内閣政治学の中で物理学をモデルにしようとする行動科学的傾向が強くなった。ノイマンの『数学的ゲーム理論』の出現がその契機であった。しかし伏見先生や湯川先生の本から深遠な物理学を学んだことで、私はまよかしの物理学主義には批判的にならざるをえなかった。多くの政治学者は古典力学と量子力学の区別も知らなかったのである。例外はアナトール・ラバポートのゲーム理論解釈であった。ラバポートを社会科学のアインシュタインと感じたので高校の時の友人の自然科学者森祐二君（現広島大学平和科学研究センター教授）とラバポートの『現代の戦争と平和の理論』を翻訳した。一九六九年のことである。

一九六〇年代の後半には、京都科学者会議と呼ばれてラバポートを紹介する機会があり、湯川先生と朝永先生から色々とコメントをいただいたことは私にとって大きな喜びであった。その時ラバポートの翻訳がなお校正途中であった。伏見先生が京都科学者会議のその席にいらなかったことは残念であった。

八〇年代にはいつてダイソンの『武器と希望（Weapons

and Hope）』を米国から持ち帰り伏見先生と久保亮五先生とにお見せした。それが契機となって伏見先生がダイソンの本の研究会を開催されて私にも参加を求められた。この研究会への参加が少年時代からの先生のイメージを再活性化させてダイソンの翻訳『核兵器と人間』につながったわけである。

物理学者にはなりそこなったが平和の問題で先生と協力してダイソンの本の翻訳者の一人として名前を連ねさせていただいたのは永年の夢が実ったことを意味した。最近、科学の進歩と科学者の倫理の問題がきびしく問われる時代になって来ている。ダイソンの本は、物理学者が現代の核軍拡競争と核戦略の問題に解答を求めようとするとき、どういう考え方をすべきかということについて深い議論を展開している。ダイソンの本を読んでから核軍縮の議論をするということになると核軍縮についてどのような立場にたつ人も自分の議論を再構成して見る必要を感じるだろう。先生とダイソンとの長い交友関係は国際政治学者や平和学者にもつきせぬ新鮮なインパクトとなっている。伏見先生についての少年時代からの私のイメージがいま実り、月報の末端に先生と私の関係に焦点をあてたバーソナル・ヒストリーの記述をのせていただくことになった。身にあまり光榮である。伏見先生が今後も世界の物理学者のネットワークの中で平和のための活動をいっそう強化されること

を祈念して止まない。

（東京大学名誉教授）